

おお、小屋酒場

08.5.17 北陸中日

金大ワンゲル部員、OB

金沢大ワンダーフォーゲル部とOB会が長年、金沢市の犀川ダム奥にある高三郎山(1445m)で登山道を整備している。市の助成金は打ち切られ、本年度からボランティア。それでも17、18日には各地からOBらが集まり、登山シーズンの準備をする。

(渡辺聖子)

高三郎山 補助廃止でも自主整備

「登山道 絶やさぬ」



高三郎山はホンシヤクナゲや紅葉が楽しめ、山頂付近は県自然環境保全地域の特別地区。「日帰りの白山登山より厳しい」と話す人もいる山で、以前はワンゲル部の新人生ト

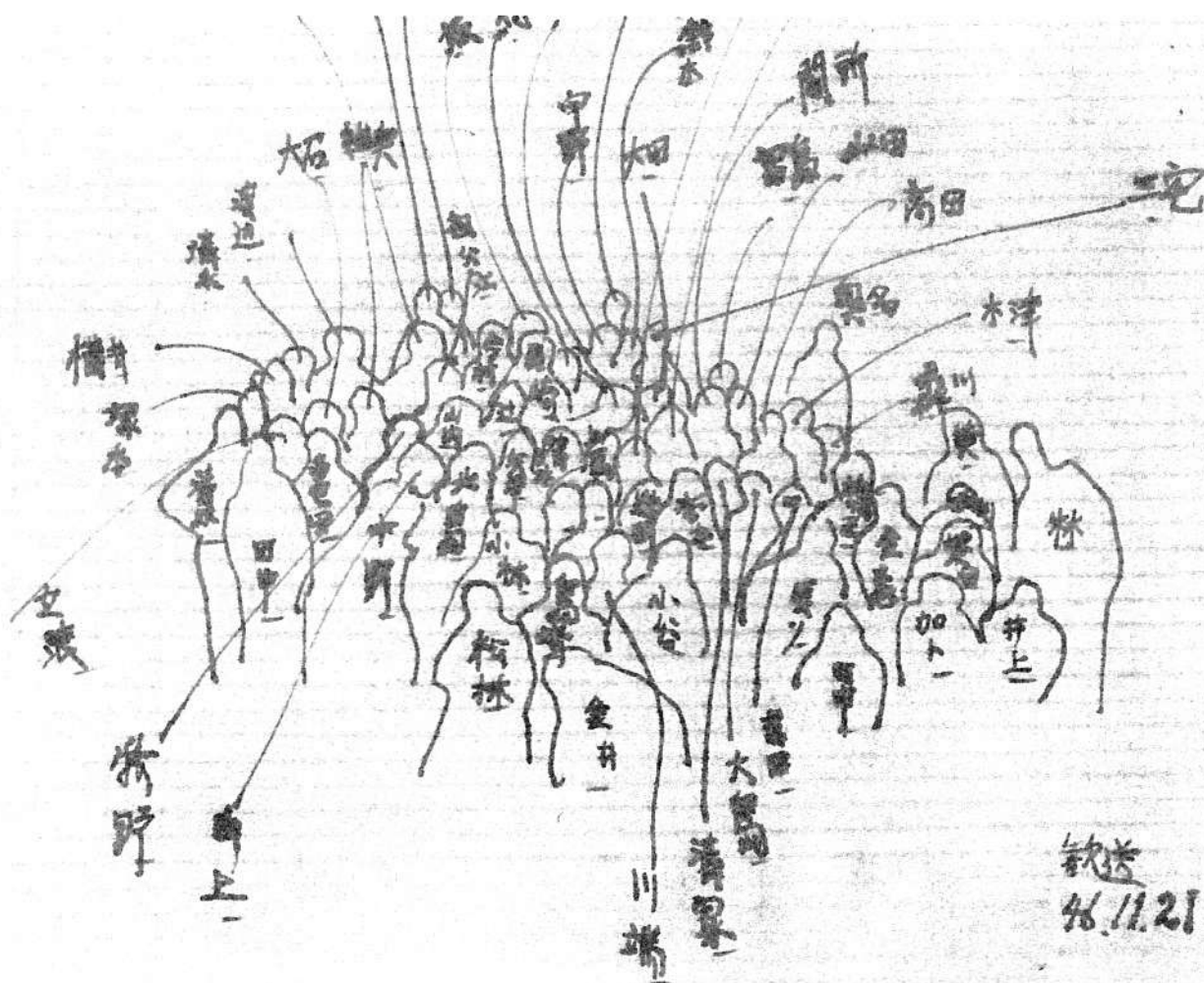
レーニングに使っていた。毎年、OBらは五月、現役部員は九月に山に入り、登山道の木や草を刈り、山小屋を整備切られた。

ワンゲル部は助成金を遭難などに備えて積み立てていた。現役の男子部員は「搜索ヘリコプターを飛ばすと大金がかかる。貴重な収入の一つだった」と残念がる。

市内に住むOBの一人は「廃止の影響で参加する人は限られてくるかもしれない。しかし、放っておけば道はなくなる。愛着がある山だからそうなつては残念だ」と今年も高三郎山に向かう。

金大ワンゲル部OBが登山道を整備している高三郎山(2004年撮影)(OB会提供)

酒は旨いし 自然はきれいだ♪



欽送
46.11.21

「こんな写真があったよね」と言えば、「そうそう、あんなのも有ったよね」という仲間が



そんな仲間と一緒に楽しい時間を共にしましょう B. H. で。

2007

春の山小屋酒場

5月12日(土)～13日(日)

◎メンバー表と行動予定

(ナカオの5月例会山行も同時に実施)

			12日(土)			13日(日)		
			ダム発			ダム着		
新顧問	竹内義晴	竹内カー	6時発	高三郎登頂	宿泊		11時	
6期	小川修司	小川カー	8時発		宿泊		11時	
8期	篠島益夫	小川カー	8時発		宿泊		11時	
15期	間所新一	間所カー	8時発	ダム直行	宿泊		11時	
15期	間所美智代	間所カー	8時発	ダム直行	宿泊		11時	
12期	野村益己	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊		11時	
6期	合津尚	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊		11時	
11期	長岡正利	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊		11時	
13期	辰野隆義	辰野カー	8時発		宿泊		11時	
13期	吉本良治	辰野カー	8時発		宿泊		11時	
13期	大島良治	辰野カー	8時発		日帰り(奥名カー)			
15期	上馬康生	上馬カー	6時発	高三郎登頂	宿泊		11時	
15期	佐野哲雄	奥名カー	8時発		宿泊		11時	
16期	北川隆次	中野カー	8時発		宿泊		11時	
16期	中野淳一	中野カー	8時発		日帰り(中野カー)			
15期	奥名正啓	奥名カー	8時発		日帰り(奥名カー)			
15期	舟田節子	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊		11時	
ナカオ佐々木(女)			6時発	高三郎登頂	日帰り(佐々木カー)			
寺西(女)			6時発	高三郎登頂	日帰り(佐々木カー)			
ナカオ男4			車			5時ダム発	高三郎登頂	



《山下さんに舟を手配してもらおう。これはダム8時発組》

6期小川 船頭さん 8期篠島
15期間所 15期奥名



《高三郎登頂組 (撮影: 15期ナカオ 舟田)》

竹内新顧問 11期長岡
ナカオ 12期 6期 ナカオ 15期
佐々木 野村 合津 寺西 上馬

屋頂に登り着いた高三郎の山頂では、木々の芽生えの彼方に残雪の白山。時折濃くなる絹雲の下に遙かに望む北アルプスは、淡くかすみつつも白馬から穂高までの一望。下山は、途中から新道尾根へ。すっきりと立つ新緑のブナが見事でした。（長岡）



《新道整備をやってくれたナカオの面々。長岡さん差し入れのスイカで対応。》

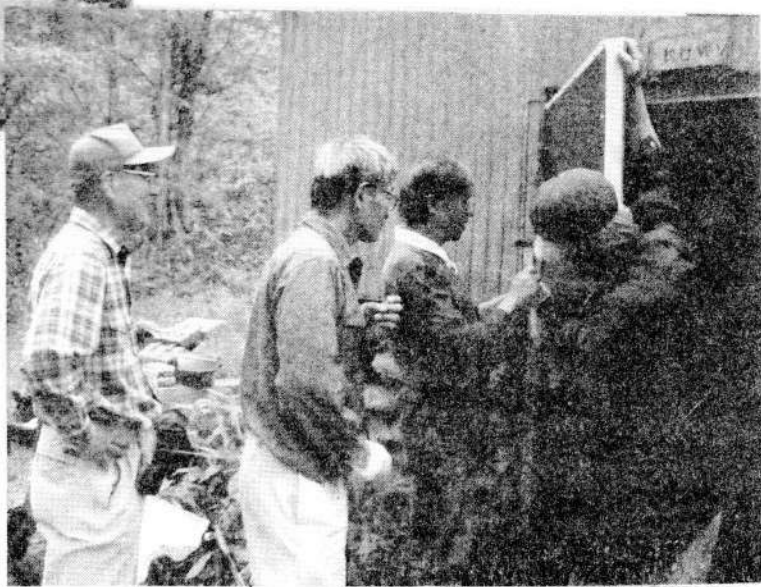
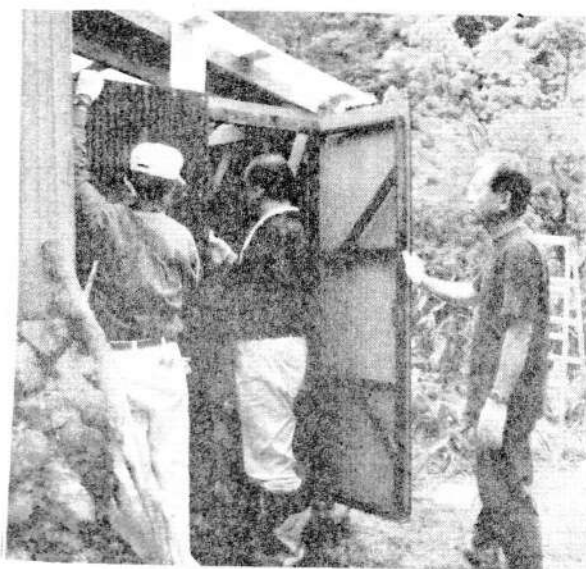


16期中野 13期吉本 15期間所

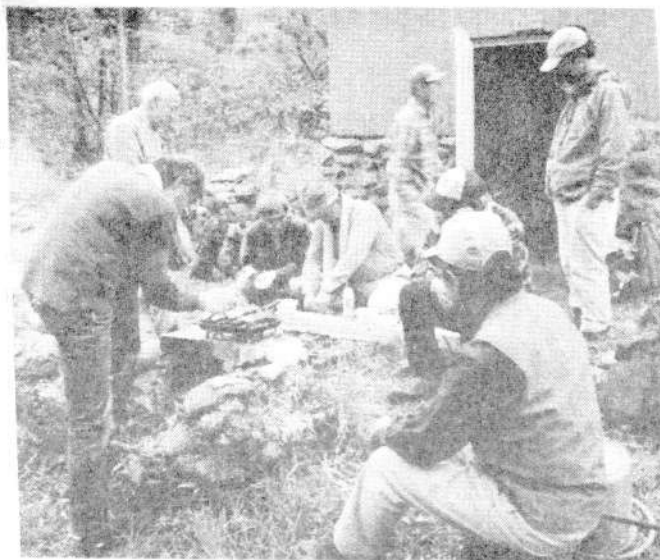


着々と仕上がっていくトイレ
13期大島 13期辰野 13期吉本

さて、たどりついたBHでは、小屋の補修（特に戸と水洗トイレ）と水場確保に大わらわの時間帯でした。のんびり山頂往復が申し訳ないような。（長岡）



6期小川 16期北川 15期佐野 田村教祖



12期野村 6期小川 竹内新顧問
16期北川 8期篠島 6期合津
15期佐野 15期上馬

メールから 8期 篠島 益夫
奥名さん 当日は朝の集合からお手数をかけま
した。忙しい昼(?)だけの付き合いで残念で
したが。

間所夫妻 美智代さんには、料理、掃除、片付けなどで、初めての参加で勝手が判らない内から活躍頂き、有難う御座います。お疲れがでませんように、これに懲りず、参加して下さい。

舟田さん 酒場の段取り準備カラ山のガイドから、相変わらず皆でお世話を掛けました。いつもながら有難う御座います。ナカオメンバーの立ち寄り、交流も良い刺激になりました。

長岡さん 地学的アドバイス、専門領域からの疑問解決等、知恵を有難う。てんぶらも相変わらず上手ですね。美味かった。

野村さん 高三郎登山、白山展望、ベルクハイム宿泊、山菜料理堪能など、永年の夢が全部実現出来たようで良かったですね。これからも継続参加を期待します。

メールより 15期 間所 新一
遅くなりましたが、小屋酒場の写真を送ります。
楽しい二日間でした。お世話下さったみなさん、
ありがとうございました。

16 15 16 13
北川 佐野 中野 大島

11 ナ ナ 12 15
長岡 佐々木 寺西 野村 舟田15 13 15 15
間所 吉本 間所 上馬

15	6	3	顧問	6	13
奥名	小川	田村	竹内	合津	辰野



6期合津 竹内新顧問 田村教祖 15期舟田



◎小屋酒場の記憶

私が参加させていただくようになって何年が経つでしょう、そしてきっかけが何であったのか、もう記憶が定かではありませんが、ここ数年、ベルクハイムに行くことを楽しみにしている自分がいるように思います。そのことを少しだけしたためようと思います。

私自身は16期であり、昭和49年のオイルショックが起きる夏に、現在の明るい山小屋への改修計画を実行した代にあたります。この改修計画費用は当時で60万円ほどで、当時のOB各位の寄付に依存したのは言うまでもないことです。

改修作業は、現役部員全員と15期の一部のOBの方で進められています。詳しいことは、2005年の“やまざと”の中で現OB会長の梶氏による寄稿を参照下さい。私の記憶で鮮明なのは、オロロを避けて早朝から資材を搬入したが、それでもオロロにかまれたこと。暑さとオロロを避けるタメコンクリート堰堤の深い淵で泳いで気持ちがよかったこと、同期で一人だけ怪我をするやら盲腸になるやらと災難を背負ってくれた者がいたこと、作業はきつかったはずなのに、そんな些細なことしか出てきません。

話は変わって、倉谷の風景の移り変わりが著しいことに驚きます。私達が学生の頃との風景とはいくつか違いがあります。

その1…吊橋を渡ると村の古びた廃屋があり石碑が威厳をもって立っていたこと。

今は廃屋はなく、石碑も倒壊しています。

その2…ベルクハイムへの登り口の少し手前には砂地の広場があり、流木に火をつけ、多人数で大きな円陣を作り歌を歌えたこと。

今は川筋が大きく変化しています。

それらが大きく変化したところでしょうか。変わらないのは、ダムから二つ目の切れ込みを過ぎたぶな林区間、ここは変わらぬ“静けさ”をたたえたままです。それと川原からベルクハイムまでの急登でしょうか。毎度のごとく“ここを登れば”という気持ちになります。

◎小屋作業のことなど

13期の大島さん 辰野さん 吉本さん 吉



《水位観測所付近はまもなく、水没の運命》

田さんの長年の尽力と、現役部員の資材搬入支援、それと舟田さんの食事メニューのおかげで、今年の秋は、ついに仕事らしきは、ベルクハイム登り口の草刈りとステップ補修程度で済みました。来春はベンチ作ろうか、いやもっと周りの景観が見えるように、あたりの木立を切ろうかと、より小屋の生活を楽しむ作業に切り替えます。

◎ダムサイトのことなど

この秋は11期加藤夫妻の同行もあり、写真を撮りながら、花の解説を受けながら、そしてアケビを食べながら、行きは2時間、帰りは2時間半かけてダムサイトを歩きました。現役の頃はダムに着くと、あと一時間ちょっとだと一安心して先を急ぐ道のりであり、最近は小屋修復作業に時間を割くため、ひたすら先を急ぐ道のりでした。きっと来春5月ものんびりと若葉



《道中はアケビの大豊作。15cmものも…。》

色を楽しみながら歩けるはずです。

●小屋の泊りのことなど

今回 囲炉裏を本格的に使いました。暗闇に上がる炎を見ているのもよいですが、一番よいのは、夕食の時にカメムシの混入をまったく気にしないですむことでした。いつもなら、家に帰ってシュラフを手入れうるとカメムシ臭がするのですが、今回はそれがなく、煙の臭いがかすかにするだけでした。

●皆様へ

ここ数年はベルクハイムが旬なのです。倉谷で釣り糸をたれるのもよし、高三郎へ登るのもよし、ベルクハイムでビールを飲むもよし。

卒業されてから一度も寄る機会に恵まれなかった人ほど、今度一緒に行ってみませんか。

6期 合津 尚

55周年が何時か、あと何年後か？それまで元気でいられるかは不明なれども、提案をします。

(飯場おぼさんの注：来年は創部50周年です。創建33年になる山小屋がその来年はともかく、せいぜい持って55周年までかも…の話が出たため、55周年という数字になって話が始まっているのです。)

まずは、何をさておき来年の春の山小屋に参加しよう！

そこでやる気になったら、小屋の延命策を検討しよう。最近我が家も30数年使った家をリフォームしたばかりで、これが終の棲家となるでしょう。

小屋も段階的に改良・修繕作業をやれば、費用も労力も分散される。そろそろ、金はあるけれど閑もある人、閑だけある人等などが輩出される時期と思う。そこで年度単位のメンテナンス計画をたてるとか、担当を決めるとか、次回小屋酒場で議論しよう。

いろいろな分野で仕事をしたり、趣味があったり、人材と知識には不足はないはずでしょう



《吊橋も健在。クルミ、アケビ、差し入れしてもらったモタセなど、もう秋の実りが一杯》

。当方も橋のメンテナンスの会社に籍を置いていますので何か役に立つかも。

それから55周年とかの記念事業では、山小屋維持費を寄付して貰うとかすれば、それ以後の老後の介護資金にもなるでしょう。

結論：来年の山小屋酒場に参加して、そこで考えよう！

2007

秋の山小屋酒場

10月13日(土)～14日(日)

●メンバー

11期加藤忠好・智美 11期小山清 13期辰野隆義
13期吉本良治 15期舟田節子 16期北川隆次



《旧工学部は今、金大付属高校の仮校舎になっている。見送りに来て下さった井上さん。》

15 16 11 13 11 11 11

舟田 北川 加藤 吉本 井上 加藤 小山

今年就職した娘が「幸せのちから」というDVDレンタルを借りてきた。いかにもアメリカ映画だ。英語のタイトルが Pursuit of happiness ではなく the pursuit of happiness となっている。映画の最初のシーン、主人公がドアに書かれた綴りの間違いを指摘するが、指摘された方がヒスパニック系で英語がわからないという仕掛けがある。この間違いは何を意味するのか、私にはわからない。いつか英語で飯を食ってきた井上さんにおしえてもらうことにしよう。映画の筋書きはこうだ。数学的素養があるらしいが経済的に窮乏している男の物語である。妻に逃げられても息子を手放さないで頑張っている。いつかは幸福になると信じて努力する。努力してもさらに状況は悪化していくが、最後にその努力が報われるというものだ。Pursuit of happiness は合衆国独立宣言に出てくる言葉である。独立宣言の存在は知っていたが、内容については記憶がない。「自由」「平等」「幸福の追求」を天賦の人権としているらしい。第3代大統領となるジェファークソンが起草したものであるが、「幸福」を彼はなぜ与えられる権利でなく、追求する権利としたのだろうか。このことがこの物語の伏線であるようだ。

眼を転じて日本。山紫水明の国といわれてきた。どこにでも豊かな緑が続き、清らかな水が流れていた。まさに天賦の自然であった。現代の日本人はどうか。都市生活者のほとんどは、山紫水明は死語に近いものとして諦めている。いや、諦めているのではなく希求しないだけである。

今年の暑い時期だったと思う。小屋酒場の案内が届いた。毎年案内は来るが行ったことはない。だいたい私は下戸である。学生時代は追い出し登山に毎年参加していた。が、酒を飲むのは好きでなかった。その頃は、レッドは学生でも手の届く高級酒だったらしく、これをアルミの食器で飲むのだ。付き合いだから、底から5mmの深さぐらいついでもらい、それをチビリチビリ時間をかけて飲むことでごまかしていた。せっかく山小屋に行っても呑兵衛の愚痴なぞ聞きたくない。そんな場面では紫煙が幅を利かすのが相場だ。長い間、そのような幻想から小屋行きを避けていた。

KUWV 創立45周年記念行事以降、OB会近畿支部が発足した。これも篠島さんのお陰というか執念というか、ほぼ毎月に近い形で例会がある。学生時代の活動とは趣が違い、私のようなメタボ症候群でも参加できるような計画を立ててくれるのがあり難い。特によく集まるのが、正月前後の会と秋のサンマパーティである。秋の会には、奥名さんや舟田さん等が金沢からよく参加される。そういうこともあり、その返礼として今年、おそろおそろ山小屋酒場を覗くことにした。ついでにと金沢近辺在住で同期の小山さんや井上さんを誘ったが、小山さんが一緒に参加してくれることになった。

バスが遅れ、集合地に旧工学部前に行くと今回の参加者が待っていてくれた。井上さんが、慶事の当日であるにも拘わらず見送りに来てくれた。犀川ダムまでは、快適なドライブである。駒帰のバス停から歩いた昔が懐かしい。が、ダムまでの2時間の歩きは今ではもう出来そうにない。ダムからブッシュの中を歩くつもりでいたが、ミゾソバとツリフネソウの見事なお花畑であった。今年は、アケビが豊作。しかも、きれいな薄紫をしている。バナナのように口に含む。アイスクリンのような食感が口の中に拡がる。甘い汁をクチュクチュやって、唇を細めて種を思い切り遠くまで吐き出す。なんともいえない快感だ。そんなことをしながらダム湖の入り江を過ぎ、吊り橋を渡ると倉谷だ。水が透きとおるようにきれいだ。いつの時代にまでタイムスリップしているのだ。ここは見渡す限り山紫水明の世界なのだ。その中で、小屋に水を引き、小屋の前の草を刈り、小屋の掃除をし、小屋の手入れをする。小屋の前には胡桃の木がある。実がいっぱい落ちているので拾って洗う。

小屋酒場という語感から勘違いしていたのだが、山小屋で飲んだくれるのではなく、自然の中での作業を楽しむのが主目的であるようだ。今回のように辰野、吉本、北川さんなどの金沢在住の有志が丁寧な維持管理の仕事をしてきているからこそ、快適な小屋生活が可能なのだ。床板もベニヤではなく単板だ。だから、実に感触がいい。舟田さんは相変わらず凝り性だ。今回も「加賀御前」と称して色々な加賀野菜を使った料理を準備してくれた。白山堅豆腐の朴葉味噌焼き、加賀蓮根の蓮蒸し、もたせ入り芋煮、む

かご入り栗ご飯。それを山小屋でするのだからすごい。特に、蓮蒸しがうまかった。お茶会もあった。清冽な谷の水を使う贅沢がどこにあるのか。

今回の小屋作業は燻しだとのこと。谷の流木を集め囲炉裏で燃やした。猛烈な煙だ。小屋だけではなく、人間も燻される。昭和43年の正月にどか雪が降った。剣岳に入っていた金大山岳部が遭難した。連日の報道の中で、我がKUWVはその救援活動をしていた。宿舎は早月川最奥の伊折。自分たちの食料も慎ましかったが、暖といえは囲炉裏の火だけであった。夜は燻され、昼は吹雪の中を馬場島までボック作業に明け暮れた。燻されながら、ふっと、そのことを思い出した。家に帰ってからザックに沁みついた臭いが取れない。今回もそうだ。体や頭についた臭いは、帰りに立ち寄った曲水温泉ですっかり洗い流したが、ザックに沁みついた臭いはとれない。懐かしいが困る臭いでもある。しかし、それは山紫水明の地にいた証でもある。「山紫水明」は死語ではない。今もベルクハイムに息づいている。希求すればいつでも手に入る。幸福はやってくるのではなく、求めるものであると同様にである。

先日ザックを嗅いで見たが、沁みついてた煙の臭いはいつの間にかすっかり抜けていた。いつの日にかまた、我がベルクハイムを訪れることにしよう。誰かを誘って。緑豊かで、清冽な水が流れ、学生時代の気分にあふると戻られる空間を……



《昼の膳 明石サンマパーティー残りのそうめん（元は4期下出さんのさしいれ）
倉谷産ミョウガ、子持ち鮎甘露煮 白山堅豆腐の朴葉味噌焼きなど。
山小屋には炊事具一式の他、食器も12人分が常備されています。》



《本場クサヤを焼き、加藤家隣の庭からのスタチをかける贅沢な朝食》



《背後には小屋いぶしの煙が…。
手前は新設した流し場のベンチ》

平成 20 年春の小屋酒場

平成 20 年 5 月 17-18 日

両日とも晴れ

5 月初めの頃に夏を感じさせる程暑いと感じる日が続いた後、一転して家の中でもフリースを着たくなるくらい寒く冬に戻ってしまった。倉谷もさぞかし寒いだろうと予想して当日 17 日を迎えた。創部 50 周年を祝うかのように天気予報は晴れを予想し、かつ気温もほぼ平年並みの爽やかな初夏に戻っていた。

各地からそして久しぶりに会う面々は山形・千葉・埼玉・東京・滋賀・兵庫そして地元と今回は東日本からの参加者が目立ち、いつものメンバーとは少し違って年齢の割には新鮮な顔ぶれとなった。今回のお誘い文「すでに築後 35 年。補修にも限りがあります。いつまでもあるわけではないのです。」の一言が響いたのかもしれない。

例年よりもちょっとばかり季節は先へと進み、犀川ダムの水位も幾分低い。春はこの水位のおかげで倉谷まではボートであつという間に入ってしまう。資材も人間も楽々行けるのがこの季節の第一の魅力である。新緑の中に平地ではキリの花が、ダム湖をめぐる山々にはフジの花、道のわきにはムラサキサギゴケ、ヒメシャガといった上品な紫色の花が多い。

Bergheim までの道は来るたびに様子が違っている。崩れてしまった場所もあれば、次来た時は崩れてしまっているのではないかと危ぶまれる箇所、流されてきた石で埋まってしまった場所。それでもこの付近を訪れる人々により道はしっかりとしている。



先発高三郎登頂組 6 人は 6 時にダムを出発し 12 時少し前に頂上に全員登頂。

後発小屋作業組 9 人は 8 時にダムを出発し資材を担いで 9 時に全員山小屋着。

山小屋の登り口に毎年 TENT を張っている K さん今年も健在。前を通るたびに「一杯やっていけ」「これを持って行け」と声をかけてくる。田村さんと気があってよく話し込んでいたが今年は来れないと知って残念がっていた。

K さんからのいただきもの…サッポロビール（株主なのでほかの銘柄は飲まない）、ウド、カタハ、ススダケ、20cm 以上あるイワナ（スミ、串つき）

小屋作業組は到着して休む間もなく、内部の掃除・水確保のため取水口の整備・石段整備・山菜採り・流しの周りのタイル張り・夕飯の準備と盛りだくさん。春先小屋の内部は床に一面白い斑点模様がついている。ヘビの糞か鳥の糞かそれとも他のものか。白い斑点は 2 種類あるようにも 1 種類だけのようにも見える。おそらくは鳥の糞ではなかろうかとの上馬研究員の見解。それを見る見るうちに取り除かれてきれいな床に変身する。お昼には差し入れのウドンをいただく。



石段の整備はなかなかの重労働である。河原から平面的な石を運びあげ、それを埋める適当な穴を掘り安定するように調整しなければならない。素人の俄か作業にしては出来栄はまずまずだが、雨が降るとどうなるかかなり心配ではある。

流し場の周りは凝り性な人たちが主体となってタイルを張っていく。このタイルの下に水はけを良くするために砂を敷く。もちろんこの砂は河原から運び上げなければならない。この運搬がまた重労働で、上ってくる途中で一部を捨てた人もいるほどなのだ。そんな苦勞をしてもいざそれをあけてみると余りの少なさに愕然とする。タイル自体もかなり重いのだが、そのきれいに見えるタイル張りの下には多くの人の苦勞が隠れているのだ。

夕飯の食材となる山菜採りは自動的に小川さんの役目となる。小屋のすぐ後ろはワラビ畑、探すまでもなくニョキニョキと背丈も高く太めのやつがいくらでもある。だからと言ってひねているわけではなくやわらかく上等なものである。さらに奥にはこれまた上等なススダケがとれる。しかしこちらはやや季節遅れで伸びすぎてやや硬いところが多い。倉谷川沿いではカタハ、ウド、ワサビなども獲得。コゴミは化けてしまって見送る。どれもこれもこのあたりに生えているものは皆太く大きいものばかり。普段食べているものがみずばらしく思える。

高三郎登頂組は予定では4時に小屋に戻ってくることになっている。5分と違わず到着。故障もなく全員登頂を果たし無事戻ってきた。皆さんたいしたものだと敬服する。



下のKさんからいただいたイワナは吉村さんが捌く。慣れた手つきできれいに内臓を取り出し、さらに胃袋の中を洗い流す。丸のみしたようなカワゲラが3匹そのままの形で出てきた。一緒にもらったスミを熾してじわじわとあぶる。2匹では喧嘩になるといけないというのでイワナの骨酒にする。裏山で採ったススダケを一緒に焼く。食べるだけでなく芳ばしい香りもまた楽しめる。



山の幸を主とした夕飯はもちろん大変なごちそうだが、何といってもビールが最高にうまい。普段それほど飲まない人にも倉谷の自然の中で仲間たちと飲むビールは格別な味わいにちがいない。素敵なひと時をありがとうございます。

5期 稲葉正己
活躍

資材運び、砂運びと大車輪の

6期 合津 尚

今生の別れはまだまだのようです

6期 小川修司

今回は関西代表 山菜ばかりでなく流し台作りに精魂を込める

6期 池田 進

遥々山形米沢から来沢 高三郎と山小屋と仲間を楽しむ

7期 吉村弘二

遥々千葉から来沢 イワナの捌きは見事

9期 山中重夫

関東を盛り上げるキーマン スキーも高三郎にも積極的

13期 辰野隆義

初代オヤジ ベルクハイムが残っているのはこの人のおかげ

13期 吉田穂積

2代目オヤジ 体全体からあふれる優しさ 緻密な作業

13期 三尾秋子

中退するも山小屋が忘れられず埼玉より来沢

15期 上馬康生

白山を隅々まで知る男 山小屋最多利用者のひとり

15期 奥名正啓

最近はいつも日帰り参加 今回はゆっくり一泊 最も気の利かないひとり

15期 間所新一

近江八幡より来沢 夫婦同伴はすてきだ

15期 間所美智代

東京町田より来沢 小屋作業組の賄いを命じられる

15期 舟田節子

初代山小屋のオバハン 交代は当分望めそうもない 殿堂入りを狙う

16期 北川隆次

3代目オヤジを襲名 名実ともに頼れるが後に続くものが課題



Bergheim いつまでもあると思うな！
でもいつでもあなたを待っているよ！

文責 15期 奥名

女史のコトバ、信ずるべからず…

7期 吉村 弘二

2008年5月17,18日の春の山小屋酒場に参加させていただきありがとうございました。
卒業以来、登山らしい登山をやったのは40年ぶりで、舟田さんのネットに心が躍り、電話で登山を申し込んだ時も登りだしたときも、高三郎頂上まで5時間近くもかかるとは、まったく予想もしておりませんでした。

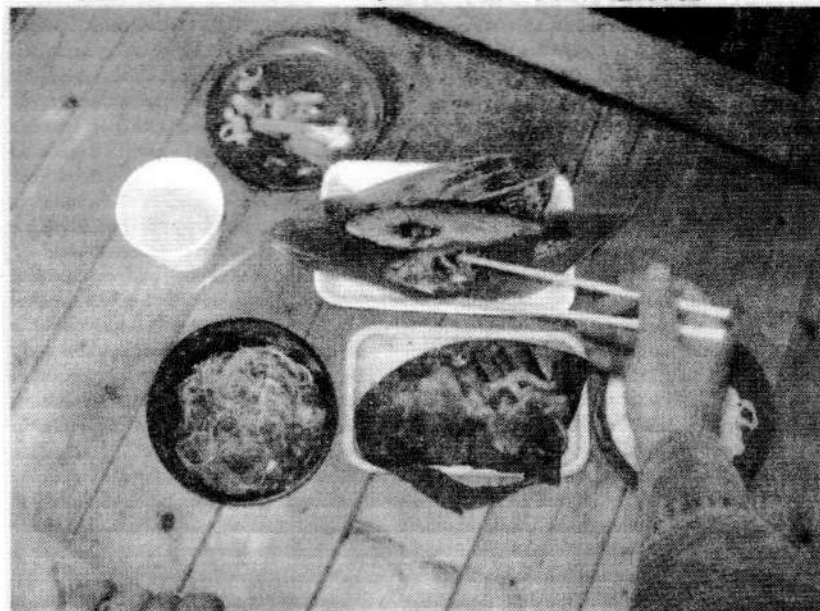
特に旧道との合流点手の急な登りは「(この急坂は)あと百歩よ。」という女史の言葉を信じて、歩数を数えながら半分違って登りましたが、私の歩幅が狭いにしろ確か二百歩はありました(女史の言葉を半分信じてなかったんだ)。

さらに、頂上の雪渓で飯を食い「さて下りは1時間半かな？」と思いきや3時間以上もかかり、登りよりきつく、腿、ふくらはぎ、膝… 足全体ががくがくで昨日21日まで座った姿勢から立ち上がるまで両手と「よいしょ！」の掛け声が欠かせませんでした。

しかし、新緑、しゃくなげをはじめいろんな花と頬をなでる風、夜の一杯はさらによかった。

舟田さん、上馬さんをはじめ、準備、設営をしてくださった皆さん。本当にありがとう！
これからもぜひ参加させてください。

photo 11期 加藤 忠好



美味い〜

小屋酒場
って、
リッチやなあ...

13期の吉田穂積です。

初代「山小屋のオヤジ」の13期辰野隆義さんの東京転勤にともなって引き継ぎましたが、次期は16期北川隆次さんにやって頂けることになりましたので、お知らせします。16期は現在の山小屋建設の中心になった人達です。